



1

陸前高田市企画部協働推進室主事大和田智広さん(32)が、震災後の3月18日から毎日発行している広報紙「広報りくぜんたかた」。「住民が必要としていること、問い合わせが多い内容に少しでも答えられたら」と震災から発行までの経緯を語る。

3月11日14時30分ごろ、大和田さんは落成した米崎保育園取材するため市役所を出発した。新しくなった保育園で園児らが喜ぶ笑顔を撮影しようなどと取材のプランを考えて公用車をスタートさせた直後の14時46分、あの巨大地震が発生。公用車を運転していた大和田さんは「車がパンクしたのでは」と感じたが、どうも様子が違うことに気づき、路肩に駐車。信じられないほどの揺れを感じ、とっさに「役所に戻らなければ」と車を引き返した。



2



3

1 広報りくぜんたかたの編集を行う大和田さん
 2 住民にとっての貴重な情報源、日刊「広報りくぜんたかた臨時号」
 3 かるうじて倒壊は免れたものの津波に飲み込まれた陸前高田市庁舎
 4 災害対策本部に掲げられた横断幕に、陸前高田市全職員の決意が
 5 が見え、撤去を見守る住民
 6 寝食、仕事のほとんど全てがこの部屋で行われる



4



5



6

大和田さんが市役所に戻ったのは、地震発生から10分後。庁舎が倒壊する恐れがあるということで職員や来庁していた市民らが市役所から外に避難をしていた。直後、「大津波警報発令」の一報。大和田さんは、災害対応の手順に従い、記録班として高田高校の裏の小さい場所へ向かった。すでに避難を急ぐ人たちが道路は渋滞していた。

道路から1キロほどの坂を上がって、やっとの思いで小高い場所へ到着。時間は15時15分だった。「急坂をこんな短時間でよく登れたと思っただと話す大和田さんは、取材用の一眼レフカメラを手にした。現場に到着したわずか8分後の15時23分、大和田さんは海岸の異変に気づいた。

来襲した大津波

陸前高田市の高田松原は、2キロにも及ぶ松林が有名で毎年、海水浴客でにぎわう同市を象徴する観光地。その松林の切れ間から海水が入り始めていた。「海が松林のため見えないために津波の被害を大きくしたかもしれない」と大和田さんは振り返る。異変に気づいた15時23分から5分後、大和田さんは目の前で起きる

信じられない光景を夢中でシャッターを切り、記録した。300枚以上撮影したというその写真には、無残にも市街地を飲み込む黒い大津波の姿が記録されている。写真の最後は、呆然としたのか彼の足と地面が数枚撮影されていた。「もしかしら職員がすべて亡くなったかもしれない」ととっさに感じたという。地震発生からわずか50分足らずの出来事である。

大和田さんはその後、いったん市役所に戻る。4階建ての庁舎は、その最上階まで津波に飲み込まれており、建っているのが不思議なほどの状態。庁舎の2階の時計は、津波に飲み込まれたであろう「15時36分」をさし、止まっていたという。

夕方までには自身の家族全員の無事が確認でき、ほっとしたのもつかの間、その夜から安否確認に訪れる人への対応など災害本部は、騒然とした状態だったという。大和田さん自身も、震災から2、3日は避難所対応や安否確認情報の整理などを行ったという。が、停電に加え文房具や紙類は、本部が置かれた給食センターのものがすべてで、事務処理はすべて手書きで行った。

安否確認はもちろんのこと、遺体の安置所、死亡届の提出先など住民から寄せられる問い合わせは日が経つにつれ、多岐にわたり、「いろいろな情報を何とかお知らせしなければ」と考え始めたという。

極限状態の住民に情報を毎日届けた

電気が回復した3月18日から、避難所となっている高田第一中学校の印刷機を使い、A3版両面刷りの「広報りくぜんたかた臨時号」を2500部発行。自衛隊が運ぶ物資と合わせて避難所への配布を始めた。

臨時号第1号には、電気・ガスの復旧状況、物資の配布方法、安否確認方法、遺体安置所の場所など数日間の中で問い合わせの多い項目を掲載した。この臨時号は極限状態の同市にあって貴重な情報源となっている。

天国の同僚に支えられあふれる使命感

大和田さんは、自宅と車を失ったため、災害対策本部のある給食センターの2階にある資料室で寝泊りしている。部屋は6畳ほどの広さだが、ロッカーや書類が所狭しと置

いてあり、実質3畳ほどのスペースで日中の業務、食事、睡眠をしている。窮屈な場所での生活が影響したのか、地震発生の日には両ひざの裏にこぶができ、呼吸が苦しくなったという。新聞でエコーミー症候群の怖さを知る。それから意識して水分補給や体操などを行ったという。

毎日、午前5時45分に「必ず目が覚める」ようになったそう。6時15分から7時30分まで広報の印刷を避難所となっている高田第一中で行い、朝食。その後、日中の業務をこなす。夜の9時ごろには翌日の原稿が出来上がり、上司の決裁をもらうのが午後11時ころ。ときには翌日になることもあるという。「この広報発行は絶対やめてはいけない」と使命感にあふれている。「ここにいることで落ち着く。何かしていないといういろいろなことを思い出す」と業務に励み、「体がよく持つと自分でも信じられない。天国の同僚たちが応援してくれているからだと思う」と今日もパソコンに向かい、情報を発信し続ける。

(取材日4月29日)